神鷲商人（ガルーダ）（下）

fukada yusuke

深田祐介

文春文庫

文春文庫

©Yūsuke Fukada 2001

神鷲商人（ガルーダしょうにん） 下

定価はカバーに表示してあります

2001年5月10日　第1刷

著　者　深田祐介（ふかだゆうすけ）

発行者　白川浩司

発行所　株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町 3-23　〒102-8008
TEL　03・3265・1211
文藝春秋ホームページ　http://www.bunshun.co.jp
文春ウェブ文庫　http://www.bunshunplaza.com

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・大日本印刷　製本・加藤製本

Printed in Japan
ISBN4-16-721926-3

文春文庫

神鷲商人（ガルーダ）

下

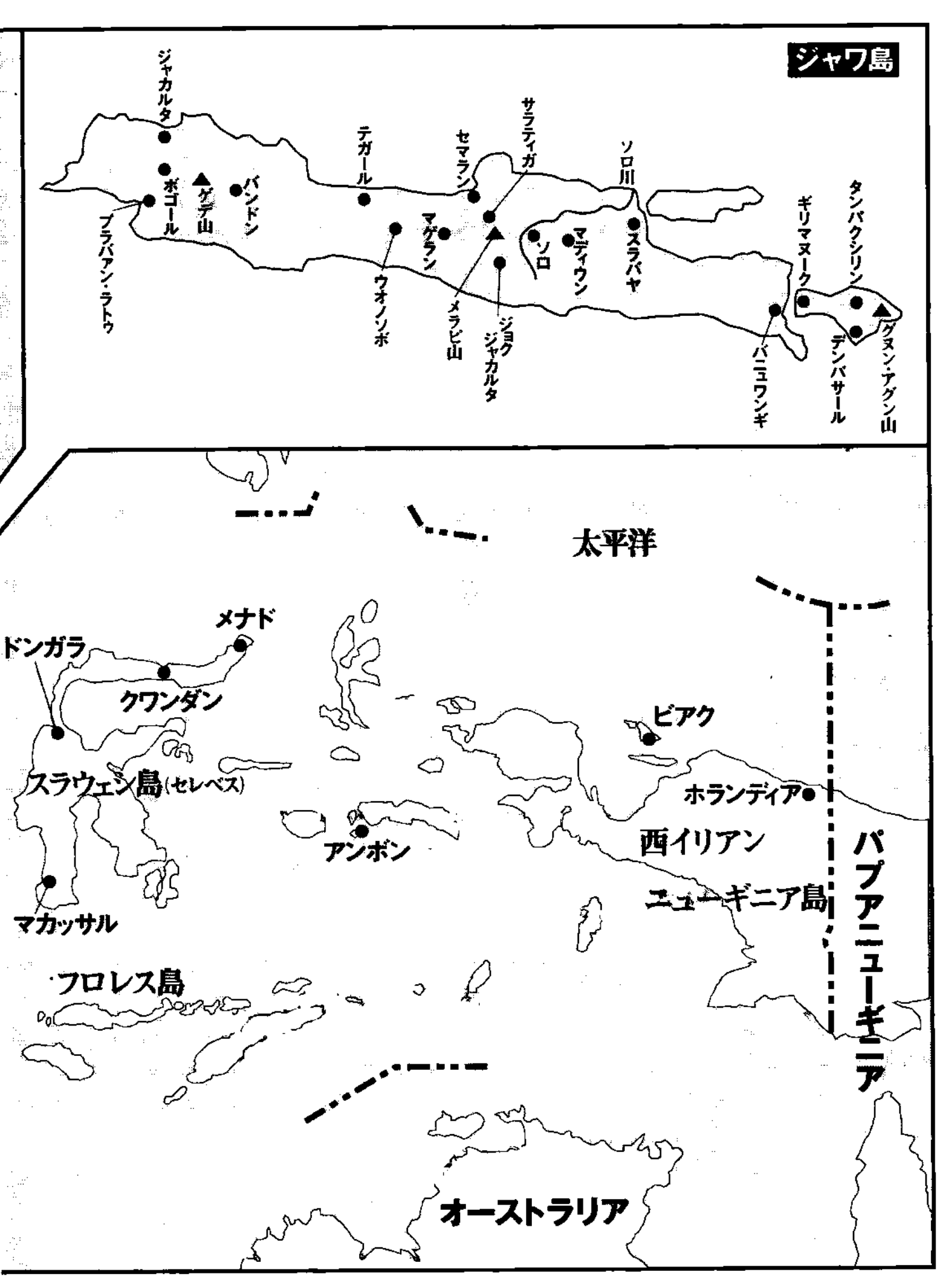
深田祐介

文藝春秋

神鷲商人（ガルーダ）

下卷

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com


ジャワ島
ジャカルタ
ボゴール
ゲデ山
バンドン
プラバアン・ラトウ
テガール
セマラン
サラティガ
ソロ川
ウオノソボ
マゲラン
メラビ山
ジョグジャカルタ
ソロ
マディウン
スラバヤ
ギリマヌーク
タンバクシリン
バニュワンギ
デンパサール
グヌン・アグン山
太平洋
メナド
ドンガラ
クワンダン
スラウェシ島(セレベス)
マカッサル
アンボン
フロレス島
ビアク
ホランディア
西イリアン
ニューギニア島
パプアニューギニア
オーストラリア

インドネシアとジャワ島

★なお、地名、国名などは、小説の舞台となった1960年代当時のものです。

大統領夫人

1

直美がスカルノと正式に結婚して暫く経ったある午後、東邦商事の富永が、チドリアンの白象の家に、直美を訪ねてきた。

「いろいろとお世話になりました。それにきれいなお花をありがとう」

富永が日本国籍離脱の手続をすべてやってくれ、結婚のときにも大きな花束を届けてくれたので、直美は富永にそう礼をいった。

「ご結婚、おめでとうございました、直美さん」

富永はそういってから、照れた顔になって、

「直美さんなんて気やすく呼んじゃあ、まずいんだな。これからは、ディア・メラティ・スカルノ夫人なんだ」

頭を掻いた。

「富永さん、私ね、法律の上では、スカルノの妻になったんですけれど、まだスカルノ

の姓は名乗れないの。私たちの結婚はまだ内輪だけの秘密なんですよ。この結婚が新聞や雑誌で攻撃材料にされると、大統領の政治生命にかかわるということなんです」

富永は頷(うなず)いて、

「おまけに時機が時機だしね。毎日、西イリアン向けの義勇軍が次々に出発しているご時勢に、大統領が外国人の妻を娶(めと)る、というのは、微妙な話だからな。ところでね、今日、ここにきたのは、これを渡すためだったんだ」

サファリ・ルックふうの上着の胸ポケットから、黒革の旅券(パスポート)を取りだした。

「黄田大使がね、これをあなたに記念として渡してくれっていうんだ。ときどきこれを見て、日本国籍を捨てて、インドネシアに帰化したときの決意を思いだすようにして下さいっていっておられたよ」

受け取ってみると、それは日本国発行の直美自身の旅券で、黒革の表紙に黒枠の「VOID」(無効)の印字が押してある。

「これが日本なら旅券の表紙にVOIDの字をぶつぶつ、穴で打ち抜くんだけど、ここの日本大使館にはそんな機械はないからね、おおきなハンコを使ったんだよ」

直美は旅券のページを繰ってみたが、菊の紋章のついた見返しにも、旅券番号や発行年月日を記したページにも、有効期限を記したページにも「VOID」の黒い字がはっきりと執拗(しつよう)なほど刻印されている。

ショックだったのは、渋谷のデパートの写真部で撮影した、いかにも稚(おさな)く、初々しい

感じの直美の写真にも、ＶＯＩＤの字がかぶさっていることであった。
「私ね、今、やっと実感が湧いてきた。私、日本人じゃなくなったのね」
直美はＶＯＩＤの印字が自分の生身に刻印されたような錯覚を味った。まるで自分自身が日本人として「無効」ときめつけられているようで、自然に涙がにじんできそうな、強烈な衝撃を受けた。
「極秘の結婚っていったって、やっぱり少しずつ周囲に知れていくだろうからね。全くの陰の存在だったときより、これからはずっと難しい立場になると思うよ」
富永は生真面目な顔をしていう。
「インドネシア大統領夫人として、それも日本からお嫁にきた大統領夫人として、なにをなすべきか。あなたの前には、大変な課題があるわけだ」
――大統領夫人として、最初に果すべき義務は、じつは東邦商事という、日本向けのパイプを排除して、整理してしまうことではないのか。もっとまともな、ちゃんとしたパイプにすげかえることではないか。
富永の顔をみつめながら、直美はおもった。
小笠原の家に泊った夜、小笠原が寝室に侵入してきた一件は、小笠原の無法者としての素顔を白日のもとにさらして見せたようにおもう。
あのとき、直美は、どう扱ってもいい、道具としてしか見られていない自分の立場をはっきりと実感し、その実感がしこりとなって残った。

なぜか寝室侵入事件を知ったスカルノにも、この一件はしこりとなって残っていて、最近では決して積極的に小笠原を評価しなくなっている。不快な表情を隠そうとしないときさえある。

畢竟、小笠原というのは、在日アメリカ人から買い叩いて、手に入れた外車を日本の企業に法外な高値で売りつけて、ボロ儲けしてきた「闇ブローカー」なのだ。一攫千金を夢見る山師に過ぎないのだ。

自分の日本国籍がＶＯＩＤになった、というのは、これまでの小笠原を中心とする日本コネクションもＶＯＩＤにしてよい、という意味ではないのか。

親身な忠告をしてくれる、この富永には気がとがめるけれども、大統領夫人として、まずなすべきことは、小笠原と東邦商事の排除なのだ、と直美はおもった。

「富永さん、話はまったく違うけど、東邦商事は日本の政治家と強いコネクションを持っているんですか」

富永は話題の飛躍にいぶかしそうな顔をしたが、

「岩下産商の真似をして、政界に強い縁故を持とうとはしているな。一番関係があるのは、児玉機関の児玉誉士夫だな。児玉さんは政財界に隠然たる勢力を持っているみたいだが、うちの社長はしょっちゅう出入りしているよ。児玉さんを通じて、北炭の萩原吉太郎、大映の永田雅一といった財界人、それと自民党の河野一郎とも親しいみたいだな」

これは容易ならぬ相手であった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

小娘の手には到底負えそうにもないが、どこかで小笠原の尻尾を摑まえて、インドネシアから追放してしまわなくてはならない、と直美はおもった。

2

富永がタンジュン・プリオクに入港している興安丸から、茶会に招かれたのは、それからまもなくである。

興安丸は相変らず、ジャカルタ・ロイドとの契約で、インドネシアの島々を繋ぐ国内航路に就航している。この国は「そのうち、そのうち」といいながら、いっこうに時間を気にしないお国柄なので、定刻通りに発着する興安丸は特異な存在であり、評判が高かった。その興安丸にこのところ故障が続き、一度点検のため、日本に戻ることになり、そのお別れの茶会を催す、という。

招待主の船長の名前を眺めて、富永はおや、とおもった。興安丸の船長の名前は、但馬でなくて野本になっていて、一等航海士だった野本が船長に昇格したらしい。

人なつっこい野本の童顔をおもいだし、富永はすぐに出席する旨の返事を書いた。

タンジュン・プリオクで埠頭に横附けされた興安丸をみて、富永は、「興安丸もあと五年ぐらいの命だな」とおもった。

白く塗られた船体は、ところどころに皺に似た凹凸が目立って、いよいよ厚化粧の老女の如き、老醜の度を加えている気がする。

富永が興安丸のタラップを上り、一等船室のサロンに案内されると、すぐに野本が立ちあがってきた。
「やあ、富永さん、だんだんジャカルタの主みたいな顔になってきましたな」
「まさかまさか、いつまで経っても動きに無駄が多くて、東京から怒られてばかりいますよ」
ふたりは手を握り合った。
部屋には、船の高級士官のほか、船会社、ジャカルタ・ロイドのヌグロホ、宗教省のサプトがいて、それぞれ久闊を叙すべく握手の手を差し伸べてくる。
まもなくハルティカも母親と一緒に船に上ってきた。
「ハルティカさん、今日は芸術家みたいな感じだな。ずいぶん服装の趣味が変りましたね」
野本がハルティカにいった。
ハルティカは、インドネシアの女性にはほとんど見られないズボンを穿き、胸の開いたブラウスを着ていて、造型芸術家かインテリア・デザイナーと受けとれそうな恰好をしている。
ハルティカは微笑をうかべて、なにも答えなかったが、サプトが野本の質問をひきとって、
「彼女は今や女性ジャーナリストですよ。新聞や雑誌に政治から女性問題までエッセイ

を書きまくっているんですよ」

そう説明した。

一同が席に就き、英国ふうに紅茶とビスケット、サンドイッチなどが供されたが、紅茶の茶碗を口に運びながら、ヌグロホが、

「去年の国家総動員令以来なにしろインフレーションがひどいだろう。ミスタ・野本も、興安丸用の水や食糧の購入にいろいろと裏の苦労をしているよ」

という。

米や衣類の値上りがひどく、砂糖、油、石鹸などが市場から姿を消しているのは事実であった。

野本は苦笑をして、

「船を預っていると、なによりタンジュン・プリオクの水の値段があがるのには、驚きますな」

といった。

「とにかくひと航海して帰ってくると、水の値段が倍近く上ってしまうんですからね。その話をすると、ハルティカさんは機嫌をわるくするだろうけど、最近はまた水浴に使う水の量をそれとなく調べていますよ」

メッカ巡礼の際、野本と富永がハルティカが水浴に使用する水の量を調べて、水浴姿を覗き見している、と誤解された話は、皆知っているから、どっと笑いが起きた。

しかし当のハルティカだけは笑いにのらず、
「水が足りなくなると、海水を混ぜたりするんじゃないの」
険のある発言をして、座がちょっと白けた。
「最近じゃ、食べられない連中が軍隊と役所に殺到してくるんだよ。軍隊と役所に入れば、少くとも着る物と米と石鹸は現物支給されるからね。現物のほうが紙きれみたいな紙幣よりありがたいってわけだ。しかもだ、この頃じゃ、経済問題で大統領に直言しようものなら、灰皿が飛んでくるって噂だよ」
サプトが眼鏡を光らせて、いう。
オックスフォードで経済学を専攻してきたサプトは、経済官庁で働きたい希望がかなえられず、一種の欲求不満があって、スカルノ政権の経済政策に絶えず批判的であった。
「今度だって、ジャカルタを手始めとしてインドネシア全国に、デパートのチェーンを作ろう、というんだろう。大統領はモスクワのGUMやなにかに匹敵するデパートをインドネシアにもつくりたくてしようがないんだ。しかもインドネシア各都市に作る、というんだよ。ここだけの話だが、今どきデパートを作るなんて、問題だとおもいますよ。また、日本に資金を調達して貰うんだろうけど、日本もいい顔しないんじゃないか。工場のオーナーが肝心の工場のほうは放ったらかしにして、別荘作りたいから、金貸してくれっていうようなもんだからね」
サプトの言葉に、富永の商売人の感覚が動いた。

「インドネシア全国にデパートを作ろう、なんて計画があるのかね」
「これはまだ公表されてないんだがね。サリナ・プロジェクトというんだよ。サリナというのは、スカルノ大統領の乳母の名前を取ったんだよ」
富永は商人的本能をおさえられず、サリナというプロジェクト名を頭に刻みつけると、
「そのプロジェクトはどのくらい具体化しているんだ。所管はどこなんだい」
とたずねた。
「今のところ、ジャカルタ市が所管だ。スマルノ長官が大統領に呼び出されてるよ」
サプトが答え富永が手帳を取りだして控え始めた途端に、それまで黙っていたハルティカが、
「あなたは、どうしてすぐに商売の話に持ってっちゃうの。日本人というのは、自分たちの利権を拡大することしか考えていないの」
富永を睨(にら)んでいった。
「日本人ときたら、おおきな利権はすべて、おさえこまないと気がすまないのね。贈収賄やってもなにしてもとにかく仕事をとろうとする。それも目先の利益ばかり追いかけるのよ」
ハルティカは唐突に立ちあがると、靴音を響かせて、サロンを出ていった。
ハルティカが一等船客用のサロンを出ていってしまうと、座は白けた。
船長の野本が日本語で、

「彼女、機嫌がわるいな。体調のわるい時期なのかな。富永さん、ご機嫌取ってきたほうがいいんじゃない」

という。

居心地わるそうに下を向いているハルティカの母親の傍で、サプトが口ひげを撫でながら、ハルティカのあとを追えとでもいうようにこれも富永に眼配せをする。

皆に促されたかたちで富永が甲板に出てみると、ハルティカは船室の壁にもたれて、タンジュン・プリオクの沖の海を眺めていた。

富永も暫く黙ったまま、並んで海を眺めていたのだが、突然ハルティカは、

「あなた、いつお母様のお墓参りにゆくの」

と訊ねた。

いかにも商売に、金儲けに夢中になって、母親の墓参にも帰らないのか、と非難する口ぶりである。あるいは、この辺に、ハルティカの不機嫌の原因があるのかもしれない、と富永はおもった。

出国許可は降りたものの、母親の四十九日も過ぎて、富永はちょっと帰国の時機を逸した感じになっている。私用で帰国すれば、当然自費で旅費を賄わなくてはならないが、それだけの余裕もない。

しかしその場の空気に押されたぐあいで、

「来週ゆくよ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com